アメリカの住宅建築におけるインターナショナル・スタイルの
形成過程に関する研究

THE INTERNATIONAL STYLE IN AMERICAN DOMESTIC ARCHITECTURE

熊倉 洋介*

Yosuke KUMAKURA

This paper is an attempt to clarify the development of the International Style in the field of domestic architecture before 1932. There seems to be three phases of the development. In the first phase, from 1907, four visible characteristics of the style appear. In the second phase, from 1926, some typical vocabularies are established. In the third phase, from 1930, popularizing of the style arise, but negative attitude in employing the typical vocabulary is noticeable.

Keywords : *the international style, United States, modern architecture, house*

インターナショナル・スタイル, アメリカ, 近代建築, 住宅

序 論

これまでの近代建築史の議論においては、アメリカのインターナショナル・スタイルは1930年代にヨーロッパから輸入されたものであるとする見方が支配的であった。特に、多くのヨーロッパのインターナショナル・スタイル建築をアメリカに紹介した「近代建築国際展」¹⁾が開かれ、同時にインターナショナル・スタイルを命名・定式化した著作『インターナショナル・スタイル』²⁾が出版された1932年以降、アメリカにおける同スタイルの展開が活発化したと言われてきた。

ところが実際は、同展や同著作で取り上げられた作品の中に、アメリカ国内の作品が含まれており、また1920年代後半から1930年代初頭にかけてのアメリカの建築雑誌等にインターナショナル・スタイルと同様の形式をもった国内の作品が散見される³⁾。こうしたことから、1932年以前のアメリカにおいてもヨーロッパと並行してインターナショナル・スタイルを形成する過程があったと考えられる。しかしこれまでその過程を一連の展開として具体的に検証した研究はなされていない。

そこで本研究は、1932年以前のアメリカにおけるインターナショナル・スタイルの形成過程の存在、およびその具体的内容を明らかにすることを目的とする。本稿での対象は住宅建築とし、アメリカ近代建築史論、および外観デザインにかかわる意匠論の2つの観点から考察する。

研究の具体的な方法は、1931年までにアメリカ国内

で建設、あるいは計画された住宅作品のうち、インターナショナル・スタイルに関係するものを取り上げ、主に外観にかかわる意匠論的な作品分析を行い、それぞれの作品をインターナショナル・スタイルの形成過程という流れの中で位置付ける。

また、様式という観点から作品分析を行うにあたり、インターナショナル・スタイルの再定義が必要と思われる。なぜなら前出の著作のなかでヒッチコックとジョンソンは、1.「ヴォリュームとしての建築」、2.「規則性」、3.「装飾付加の忌避」の3つの原理によってインターナショナル・スタイルを規定しているが、これらの原理にはその表現に抽象的な部分があって、作品分析の基準とするには具体性に欠けること、また実例として示されている作品に例外が多いこと、などの問題点がある。さらに原理と並んでインターナショナル・スタイルを特徴付けているものが、水平連続窓やピロティを初めとする新しい造形上の語彙や手法（以下まとめて造形手法）であると思われるが、造形手法に関しては著者らは明確な解釈や位置付けを行っていない。

そこで本研究では、同著作の論文および作品例の分析を行い、原理が作品として具体的に視覚化された場合のインターナショナル・スタイルの特質（以下、視覚的特質）を抽出し、それらにより同スタイルを再定義する。さらに作品例に共通してみられる造形手法を取り出し、インターナショナル・スタイルにおける様式的な造形手法として位置付ける。

* 東京都立大学大学院 大学院生・修士

Graduate Student, Graduate School of Tokyo Metropolitan University, M. Eng.

まず第1原理「ヴォリュームとしての建築」に関する記述を分析し、作品例をあわせて検討した結果、ヒッチコックらの関心は、外壁を耐力壁に見せないことにあり、具体的には外壁表面を連続的に平滑にすることが意図されていることが分かった。また「陸屋根は、本質的な美学的重要性をもつ」⁴⁾と述べ、作品例もすべて陸屋根をもつ建物であることから、彼らの言うヴォリュームとは直方体のヴォリュームであると言えよう。これらのことから、面の平滑性、および、直方体による構成、という視覚的特質が導き出される。

次に第2原理「規則性」に関する記述では、等間隔の柱配置や標準部材の同一性による規則性を問題にしているが、これらは絶対ではなく例外も認められるとしているため、特に視覚的特質とは見なさない。また多層建築における規則性の現れとしての水平性について「インターナショナル・スタイルの最も顕著な特徴である」⁵⁾と述べ、ファサードにおける水平性の表現を妥当なものとしている。作品例でも水平連続窓などによって水平性を強調したデザインがほとんどである。このため、水平性の強調、を視覚的特質として取り上げる。

そして第3原理「装飾付加の忌避」は、装飾の付けられていない建物を正当化する具体的で明快な原理なので、これに準じて、無装飾性、を視覚的特質とする。

以上のように、インターナショナル・スタイルの視覚的特質として次の4つを抽出した。

1. 直方体による構成
2. 水平性の強調
3. 面の平滑性
4. 無装飾性

本論文では、インターナショナル・スタイル建築とは上記の4つの視覚的特質を合わせ持つ建築であると定義する。

また、作品例の多くに共通してみられ、インターナショナル・スタイルを特徴付けている造形手法として次の5つが挙げられる。

- ・ルーフテラス
- ・水平連続窓
- ・コーナーウィンドウ
- ・ピロティ
- ・キャンティレヴァー

ただしこれらの造形手法は視覚的特質とは異なり、インターナショナル・スタイル建築が用いていなければならない条件ではない。あるいはこれらの造形手法が用いられていても、4つの視覚的特質が満足されていないければインターナショナル・スタイル建築とは認めない。

本論文の構成は、1932年までのアメリカにおけるインターナショナル・スタイルの形成過程を、その発達段階によって分けた3つの章と、結論からなる。

I. 萌芽段階, 1907~1925

インターナショナル・スタイルの形成の最初の段階は、視覚的特質の部分的な発現段階である。つまりインターナショナル・スタイル建築の出現する前段階の、視覚的特質のうちの幾つかが住宅作品に現れ始める段階である。また様式的造形手法の使用はこの段階ではまだ限定的である。

1907年に、まず直方体による構成、面の平滑性、そして無装飾性の3つの視覚的特質を備えた作品が現れる。その作品を生み出したのはカリフォルニアで活動した建築家、アーヴィング・ギル⁶⁾である。ギルが1907年にサンディエゴ近郊に建てたアレン邸(図-1)は、当時まだ住宅としては例が少なかった鉄筋コンクリートを用いた壁構造による2階建ての建物である。

屋根は陸屋根で、全体が一つの直方体の箱をなしており、ほとんどの部屋がその直方体の中に収められている。1階のキッチンの一部だけがそのヴォリュームから突出するが、その突出部分もやはり直方体で陸屋根を持つ。

外壁にはスタッコが塗られ、平滑に仕上げられている。さらに、窓台や庇などの外壁面から突出する要素を省いた開口部の処理(鋳戸は後年つけられたもの)や、2階のバルコニーを外壁面より内側に設けていることなどが、建物に平滑性を与えている。

また、装飾的な要素は付加されていない。

このように、直方体による構成、面の平滑性、および無装飾性という3つのインターナショナル・スタイルの視覚的特質が認められる。

しかしもう一つの視覚的特質である水平性については、バルコニーの開口が横長のプロポーションになって

図-1 アレン邸, サンディエゴ近郊, I・ギル, 1907

図-2 ダッジ邸, ロサンゼルス, I・ギル, 1916

いるものの、縦長の窓が開けられているなど、特に水平性が強調されているとは言えない。

ギルが1916年にロサンゼルスに建てたダッジ邸(図一2)は、やはり鉄筋コンクリート壁構造による2階建てで、いくつかの直方体を複雑に複合させた構成を持っている。外壁は平滑なスタッコ仕上げで、開口部回りもアレン邸同様に突出物を省いて平滑に収められている。

また、アレン邸では特に認められなかった水平性がこの作品には現れている。地面に沿って水平方向に伸びる直方体の各ヴォリュームの配置の仕方や、横長の窓の多用などによって、水平性が強調されている。

このようにこの作品には直方体による構成、面の平滑性、そして水平性の強調というインターナショナル・スタイルの3つの視覚的特質が認められる。ところが、一部の出入口や中庭を囲む壁などにアーチ形の開口が用いられている。アーチは鉄筋コンクリート造にとっては構造的合理性をもたない形態であり、伝統的な建築を連想させる意匠であるため、一種の装飾的要素と考えられる。故にこの作品は無装飾性をもつとは言えない。

1919年にサンフランシスコ近郊パロアルトにクラーク&クラーク⁷⁾によって建てられたフーヴァー邸(図一3)は、鉄筋コンクリート壁構造で、直方体の複合による構成をもち、またスタッコ仕上げの外壁や突起物のない開口部回りのおさまりなど面の平滑性も認められる。

ただし窓のプロポーションが縦長であるなど、特に水平性の強調は意図されていない。また、アーチ形や装飾的に扱われた階段状のモチーフなどが外観に現れており、無装飾性をもつとは言えない。

同じく1919年に、ギルはロサンゼルスにホラシオ・ウエスト・コート(図一4)という隣接する4住戸からなる集合住宅を建てる。構造は鉄筋コンクリートの壁構造である。その1住戸に着目すると、全体は2層分の直方体2つと、背後の1層分の直方体によって構成されている。また外壁はスタッコで平滑に仕上げられている。

この作品の特筆すべき点は、水平連続窓の採用である。2階の居間の周囲3方向の壁に、ガラス窓が横方向に連続して設けられている。暖炉の煙突の部分以外、隅部ではコーナーウィンドウとなって途切れなく連続してい

図一4 ホラシオ・ウエスト・コート, ロサンゼルス, I・ギル, 1919

る。この水平連続窓の使用により、外観に水平性が与えられている。

このように直方体による構成、面の平滑性、および水平性の強調が認められる。しかし玄関ポーチにアーチが用いられているため、無装飾性をもつとは言えない。

この作品でアメリカの住宅に初めて現れた⁸⁾水平連続窓、およびコーナーウィンドウは、インターナショナル・スタイルの建築に特徴的な造形手法として頻繁に用いられてゆく。このようにこの作品は無装飾性に欠けるため萌芽段階に属するが、新しい造形手法を開発したという点では次なる段階の先駆けと言える。

II. 確立段階, 1926~1931

1920年代の前半には、まだ完全にインターナショナル・スタイルと呼べる住宅は現れない。1926年以降、4つの視覚的特質のすべてを備えた住宅作品が現れ始めて、インターナショナル・スタイルの展開は様式としての確立段階に移る。この段階では新しい構造形式が採用されるとともに、革新的な造形手法が積極的に使用され、インターナショナル・スタイルの様式的造形手法として定着する。

4つの視覚的特質全部を備えた最初の作品は、1926年にルドルフ・シンドラー⁹⁾がニューポート・ビーチに建てたロヴェル・ビーチ・ハウス(図一5)である。従来の壁構造にかわり、鉄筋コンクリートのフレームで支え

図一3 フーヴァー邸, パロアルト, クラーク&クラーク, 1919

シンドラー, 1926

られる構造形式が用いられている。全体はいくつかの直方体から構成されている。前面2階のバルコニー（1928年頃にガラス窓がはめられた）はキャンティレヴァーで持ち出されており、強い水平性を示している。バルコニーの下はピロティになっている。壁面はコンクリート打ち放し、あるいはスタッコ仕上げで平滑である。また、装飾的な要素は見られない。

このようにロヴェル・ビーチ・ハウスは直方体の複合による構成、水平性、平滑性、そして無装飾性のすべてを備えた作品である。また同時に、住宅として初めてコンクリートのフレーム構造が採用され、それにとまってキャンティレヴァーやピロティなど新しい造形手法が用いられた作品である。つまり、インターナショナル・スタイルの展開が様式としての視覚的特質の獲得の段階から、独自の造形手法を開発して行く段階に移行したことを示す作品と言える。

1927年のピーター・スミス¹⁰⁾による計画案、マサチューセッツの海辺の家（図-6）においても直方体による構成、面の平滑性、そして水平連続窓や横長のバルコニー等による水平性の強調が見られ、また無装飾性も認められ、インターナショナル・スタイルの4つの視覚的特質を備えた作品と言える。この計画案もフレーム構造で設計されており、独立柱で居室を持ち上げたピロティが見られる。また陸屋根をルーフテラスにしている。さらに水平連続窓とともにコーナーウィンドウも用いられている。このようにこの作品は革新的な造形手法が積極的に取り入れられた進歩的な傾向を示す計画案と言える。

ウィリアム・レスカーズ¹¹⁾による1928年の計画案、未来のカントリーハウス案（図-7）も直方体の複合による構成、面の平滑性、横長の窓による水平性の強調、

図-6 海辺の家計画案、ピーター・スミス、1927

図-7 未来のカントリーハウス計画案、W・レスカーズ、1928

図-8 オークレイン保育園、オークレイン、ハウ&レスカーズ、1929

そして無装飾性の各視覚的特質をもっており、またピロティ、ルーフテラス、キャンティレヴァーなどの新しい造形手法が積極的に取り入れられている。またレスカーズはこの前年にも「若いカップルのためのカントリーハウス」と題する計画案で、同様のデザインを行っている。これらのことから、ピーター・スミスの計画案とほぼ同時期に、レスカーズも進歩的なインターナショナル・スタイルの設計を行っていた事が分かる。

そしてレスカーズがこれらの計画案で示したアイデアを最初に実現したのが、1929年にジョージ・ハウ¹²⁾とともにフィラデルフィア近郊オークレインに建てたオークレイン・デイ・スクールの保育園（図-8）である。この作品は住宅ではないが、規模や機能面で住宅と共通する部分が多い¹³⁾ことから、インターナショナル・スタイルの住宅の展開と関連が深いと考え、特例として取り上げる。

全体は居室の入る直方体と、ピロティで支えられたルーフテラスから構成されている。外壁はスタッコが塗られ、平滑性を示している。また、無装飾である。そしてルーフテラスの端部が支柱からキャンティレヴァーで持ち出され、帯状のパラペットが水平性を強調している。このように4つの視覚的特質を備えている。

そして造形手法としてピロティ、キャンティレヴァー、ルーフテラスに加え、大きなコーナーウィンドウが用いられている。このようにこの作品は実施作品としてインターナショナル・スタイルの造形手法を積極的に用いた例と言える。ところがその主体構造には予算の関係でコンクリート・ブロック造が採用されている。ピロティとコーナーウィンドウは部分的に鉄骨の独立柱を用いることによって可能になっているもので、それらは主体構造と合致した合理的なものとは言えない。

主体構造のシステムと合致した合理的なやり方によってインターナショナル・スタイルの造形手法が用いられている例が、同じく1929年にリチャード・ノイトラ¹⁴⁾がロサンゼルスに建てたロヴェル邸（図-9）である。この作品は主体構造を鉄骨造とした最初の住宅である。

図-9 ロヴェル邸, ロサンゼルス, R・ノイトラ, 1929

図-10 ジョンソン夫人邸計画案, クラウス&ダウブ, 1931

均等に配置された柱梁のグリッドに従って直方体のヴォリュームが複合する構成をもち、水平方向に連続する吹き付けコンクリートのスパンドレルが著しい水平性を示している。外壁の柱とガラスとスパンドレルはほぼ同面に納められ、面の平滑性を示している。また装飾的要素は排除されている。

このように4つの視覚的特質を備え、さらにピロティ、キャンティレヴァー(実際は吊り構造)、水平連続窓、コーナーウインドウなどの造形手法が構造の率直な表現として合理的に用いられている。この作品はその構造形式、そして造形手法の合理的な使用から、確立段階におけるインターナショナル・スタイルの最も進んだ実例と言える。

クラウス&ダウブ¹⁵⁾が1931年にパインハーストに計画したジョンソン夫人邸案(図-10)は、2つの直方体がずれて重なる構成をもち、上階のヴォリュームは大部分ピロティで持ち上げられていることで独立した純粋な6面体として認識され、その結果建物に抽象的な性格が与えられている。また、そのヴォリュームの横長のプロポーションや水平連続窓が水平性を強調しており、さらに面の平滑性と無装飾性も認められ、4つの視覚的特質をすべて備えていると言える。このようにこの計画案は、建物の抽象性を強調する手段としてピロティが効果的に用いられている例である。

コーカー&フレイ¹⁶⁾が1931年に、ある建築展¹⁷⁾のために製作した「アルミネアー」(図-11)も、積極的に

図-11 アルミネアー, ショゼット, コーカー&フレイ, 1931

インターナショナル・スタイルの造形手法を用いた住宅作品である。全体がひとつの直方体で、ポーチとルーフテラスがそこからヴォイドとして抜けた構成をもち、外壁はアルミ板張りで突起物もなく平滑である。装飾性はない。アルミパイプによるフレーム構造が採用されており、外壁はキャンティレヴァーでもちだされたスラブで支えられている。この建物のフレームとキャンティレヴァーによる構造形式は、外壁面より内側に立つピロティの独立柱の存在で外部に示されているとともに、耐力壁構造では不可能な大面積のガラス窓や立面の幅いっぱいの水平連続窓によっても暗示されている。また水平連続窓は水平性を強調する要素でもある。この作品におけるピロティの効果は、前出の作品のような抽象性の強調より、構造形式を外観に示すところに現れていると言えよう。

Ⅲ. 普及段階, 1930 年以降

インターナショナル・スタイルの住宅の展開は、革新的な造形手法を追及する確立段階が1931年頃まで続くが、1930年を過ぎると徐々に次なる段階への移行が見られ始める。一部の限られた建築家たちによって革新的、あるいは前衛的なデザインとしてインターナショナル・スタイルが追及された確立段階とは異なり、1930年代を通して見られる次の段階では、インターナショナル・スタイルは時代の求める流行のスタイルとして広く普及していく。本章ではこの2つの段階の移行期である1930年から1931年にかけて見られた、普及段階の初期の代表例を取り上げる。

レイモンド・フッド¹⁸⁾が1930年にオッシュニングに建てたパターンソン邸(図-12)は、直方体が複合した構成、突起物のない外壁の平滑性、立面のプロポーションや横長の窓によって感じられる水平性、そして無装飾性(ただし施主の要請により迷彩塗装された)をもち、インターナショナル・スタイルの4つの視覚的特質を備えた作品である。しかしその構造が壁構造であるためインターナ

図一12 パターソン邸，オッシング，R・フッド，1930

図一13 砂丘の夏の家計画案，W・マッセンハイム，1930

ショナル・スタイルの造形手法の採用には制限があり、ルーフテラス以外には特に用いられていない。

ウィリアム・マッセンハイム¹⁹⁾が1930年に発表したロングアイランドの砂丘の夏の家の計画案（図一13）も、直方体の複合による構成、突起物の排された平滑な外壁面、横長の窓による水平性の強調、そして無装飾性をもつ、インターナショナル・スタイルの4つの視覚的特質を備えた作品である。しかし造形手法に関しては、フレーム構造で設計されているのだからピロティやキャンティレヴァーの採用が可能であるにもかかわらず、それらは用いられていない。また窓はその横幅が柱間に限定されているために単なる横長の窓であり、水平連続窓とは言えない。

これらのような、革新的な造形手法の採用には積極的ではないがインターナショナル・スタイルとしての視覚的特質は備えている作品が数多く現れたことが、普及段階の大きな特徴である。これはピロティやキャンティレヴァーなど技術的、平面計画的に困難の伴う手法は採用しがたいが、新しい流行のデザインは取り入れたいという保守的な建築家の意識の現れと考えられる。特にボザール派の建築家であり、それまでは様式主義的なデザインを行っていたフッドがこうした作品を作ったことは、インターナショナル・スタイルが一般に普及しはじめたことを端的に語る事実といえよう。つまりインターナショナル・スタイルのデザインが一部のアヴァンギャルドだけのものではなく、保守的な建築家の作品にも取り入れられるようになったのがこの普及段階である。

図一14 プエブロ・インディアンの住居，ニューメキシコ，1700頃

結 論

研究の結果、以上のように1932年以前のアメリカにインターナショナル・スタイルを形成する動きが存在していたことが明らかになった。通常アメリカのインターナショナル・スタイルは、ヨーロッパのその輸入という観点からのみ認識されているが、実際はアメリカ国内にもインターナショナル・スタイルを誕生させる素地があったと考えられる。

例えば、ギルの仕事によってインターナショナル・スタイルの視覚的特質が生み出されたことはI章で述べたが、ギルはヨーロッパの影響をほとんど受けていない建築家である。彼はシカゴのルイス・サリヴァンの事務所などで修行した後カリフォルニアで独立して活動するが、渡欧の経験はなく、ヨーロッパの建築家との交友も1920年代になるまでなかった。彼が興味をもっていたのはアメリカ西部のスパニッシュ・ミッションとプエブロ・インディアンの建築であったとギル自身が述べている²⁰⁾。このプエブロ・インディアンのアドービ（日干しレンガ）造建築（図一14）は極めて単純なもので、陸屋根をもつ直方体が基本となって構成されており、外壁は泥モルタルが塗られて平滑に仕上げられている。また横に連続して建てられるために水平性が強調され、しかも装飾的な要素がほとんど無い。つまりプエブロ・インディアンの建築にインターナショナル・スタイルと共通する視覚的特質を見いだすことが可能である。あるいはまた、伝統的なニューイングランド・コロニアルの住宅のデザインに、インターナショナル・スタイルの視覚的特質につながる単純性を指摘することも容易である。

こうしたアメリカの建築が伝統的にもっている単純性指向がインターナショナル・スタイルの形成を準備する下地となっていると言えよう。

もうひとつインターナショナル・スタイル形成の下地となっているものに建築技術の発達がある。アメリカにおける鉄筋コンクリートの技術は19紀末、ヨーロッパとはほぼ同時期に独自に開発された。また鉄骨造の技術はやはり19世紀末にシカゴの高層建築などに用いられて発達していた。これらの新しい建築技術は当初は主に商業建築や工業建築に用いられており、そこではキャン

ティレヴァーや水平連続窓などの造形手法が部分的に開発されていた。そして今世紀に入った頃からまずプレファブ住宅に鉄筋コンクリートが使われ²⁾、以後次第に住宅の分野にも新しい技術が応用され始める。こうしたアメリカの技術力を背景に、シンドラーやノイトラらは革新的な造形手法を実現して行く。特にノイトラによるアメリカ初の鉄骨フレーム構造のロヴェル邸は当時、近代建築の理想を実現したものとしてヨーロッパでも高く評価された。

ただし、こうしたインターナショナル・スタイルの形成を担った建築家には、ヨーロッパからの移住建築家が少なくない。特に確立段階ではヨーロッパの近代運動に身近に接した経験をもつシンドラー、ノイトラ、レスカーズ、クラウス、フレイらが主導的な役割を演じた。またスミス、ハウ、フッド、マッシュンハイムらも渡欧経験をもっており、彼らも何らかの形で近代運動の影響を受けていたと言える。こうした各建築家のバックグラウンドから考えても、1920年代後半にはヨーロッパとアメリカの間の地域的な格差は小さくなっており、インターナショナル・スタイルは大西洋を挟んで並行して発展していたと見る事が出来る。

以上をまとめて考えると、アメリカのインターナショナル・スタイルは、アメリカ建築に伝統的な単純性と、19世紀末の技術革新、それにヨーロッパの近代運動が結び付いて1920年代後半に花開いたものと言える。

そして1930年を過ぎると次第にアメリカでインターナショナル・スタイルの一般化が始まり、Ⅲ章で取り上げたような作品が現れて来る。それらはアメリカ人の建築家がインターナショナル・スタイルに興味をもち、自身の設計に取り入れ出した結果である。

こうして見ると、1932年に開かれた「近代建築国際展」や同年出版の『インターナショナル・スタイル』にアメリカ国内の例が含まれているのは当然と言える。しかしそれ以後、数多くのインターナショナル・スタイルの住宅作品が作られたにもかかわらず、確立段階に見られたような革新的なデザインをもったものはほとんど現れない。デザインの質という観点から見れば、1930年代のインターナショナル・スタイルは1920年代の作品の部分的な模倣を繰り返す不毛なものであると言える。

注

- 1) この展覧会の内容に関しては、以下の資料が詳しい。
The Museum of Modern Art : *Modern Architecture/International Exhibition*, reprint Arno Press, 1969
Riley, Terence : *The International Style/Exhibition 15 and The Museum of Modern Art*, Rizzoli, 1992
Stephens, Suzanne : Looking Back at "Modern Architecture" The International Style Turns 50, *Skyline*, pp. 18~27, 1982. 2

Wilson, Richard Guy : The International Style; The MOMA Exhibition, *Progressive Architecture*, pp. 89~105, 1982. 2

- 2) Hitchcock, Henry-Russell and Johnson, Philip : *The International Style*, 1932 1966, 武澤秀一訳, 『インターナショナル・スタイル』, 鹿島出版会, 1978
- 3) 予備調査として、当時の主要な建築雑誌 *American Architect*, *Architectural Forum*, *Architectural Record*, *Architecture*, *Journal of American Institute of Architects* の1922年から1932年までに発行された号に目を通した。その結果、インターナショナル・スタイルと同様の形式をもつ作品は20数例を数えた。また1922年以前の作品に関する資料については作品毎に付した注を参照。ただし本稿の目的は網羅的になることよりも大きな流れの検証にあるので、重要な作品のみを取り上げた。
- 4) ヒッチコックとジョンソン, 武澤訳前掲書, p. 55
- 5) ヒッチコックとジョンソン, 武澤訳前掲書, p. 79
- 6) Irving J. Gill (1870~1936) ギルに関する参考文献
Anderson, Timothy J. et. al. ed. : *California Design 1910*, 1974, reprint Peregrine Smith Books, 1989
Jordy, William H. : *American Buildings and Their Architects Vol. 4/Progressive and Academic Ideals at the Turn of the Twentieth Century*, paperback, Oxford University Press, 1986
Kamerling, Bruce : Irving Gill / *The Artist As Architect*, The San Diego Historical Society, 1979
McCoy, Esther : *Five California Architects*, 1960, reprint Hennessey and Ingalls, 1987
Scully, Vincent : *American Architecture and Urbanism*, 1969, 香山寿夫訳, 『アメリカの建築とアーバンイズム』, 鹿島出版会, 1973
- 7) Arther B. Clark (?~?) と Birge M. Clark (1894~?) の父子。アーサーはスタンフォード大芸術学部教授、バージは1914年スタンフォード大卒、1917年コロンビア大建築学科卒。
フーヴァー邸に関する資料
Woodbridge, Sally B. : *California Architecture/Historic American Buildings Survey*, Chronicle Books, 1988, p. 181
- 8) エスター・マッコイはある雑誌記事で、この水平連続窓が後に増築されたものである可能性について語っている。しかし同時にマッコイは、1930年に出版されたノイトラの著書 *Amerika* に掲載されたこの作品の写真にすでに水平連続窓が見られることを指摘している。
また、シンドラーのシンドラー&チェイス邸に関する文献に、クライド・チェイスがエンジニアとして1921年にホラシオ・ウエスト・コート of 工事を担当した事実が述べられている。これらのことから判断すると、1919年に一旦完成した建物のテラスに、2年後に屋根をかける増築工事が行われた可能性が大きい。しかし1921年だとしても水平連続窓の最も早い例であることにかわりない。
McCoy, Esther : Horatio West Court, *Progressive Architecture*, Vol. 57, pp. 68~69, 1976. 11
Neutra, Richard J. : *Amerika*, Verlag Von Anton Schroll & Co. Wien, 1930, pp. 118~119
Smith, Kathryn : *R. M. Schindler House 1921~1922*, Friends of the Schindler House, West Hollywood, 1987,

- p. 17
- 9) Rudolph M. Schindler (1887~1953) オーストリア生まれ, 1917 年移住。
シンドラに関する参考文献
Gebhard, David: *An Exhibition of the Architecture of R. M. Schindler*, University of California, 1967
McCoy, Esther: *Five California Architects*
Sarnitz, Augusto: *R. M. Schindler/Architect 1887~1953*, Rizzoli, 1988
 - 10) Peter van der Meulen Smith (1902~1928)
ハーヴァード大学卒, ボストンの設計事務所勤務後, 1926 年末か 1927 年始めにバリのアンドレ・リュルサの事務所に入り, ル・コルビュジエ, J. J. P. アウトらと親交を結ぶ。1928 年冬にベルリンで病死。
スミスに関する参考文献
Hitchcock, Henry-Russell: *Modern Architecture/Romanticism and Reintegration*, 1929, reprint AMS Press, 1972
Hitchcock, Henry-Russell: *Four Harvard Architects, Hound & Horn*, Vol. 2, pp. 41~47, 1928. 9 ちなみにこの文章の中でヒッチコックが初めて "International Style" という言葉を用いている。
J. J. P. Oud: In Memory of Peter van der Meulen Smith, 1902~1928, *International Review* 10, 1929. 2, pp. 122~123
Searing, Helen: International Style/the Crimson Connection, *Progressive Architecture*, 1982. 2, pp. 88~91
 - 11) William Lescaze (1896~1969) スイス生まれ, 1920 年移住。
レスカーズに関する参考文献
Hubert, Christian: *William Lescaze*, Rizzoli, 1982
Lanmon, Lorraine Welling: *William Lescaze Architect*, Art Alliance Press, 1987
また, Lescaze の米国での一般的な発音の表記としては「レスケーズ」より「レスカーズ」に近い。
 - 12) George Howe (1886~1955)
 - 13) この保育園の平面構成は, エントランス・ホール, クラスルーム 1 室, ベッドのおかれた中 2 階, バスルーム, キチネットから成っている。
 - 14) Richard J. Neutra (1892~1970) オーストリア生まれ, 1923 年移住。
ノイトラに関する参考文献
Boesinger, W.: *Richard Neutra/Buildings and Projects*, Editions Givsbarger, Zurich, 1951
Drexler, Arther and Hines, Thomas S.: *The Architecture of Richard Neutra/From International Style to California Modern*, The Museum of Modern Art, 1982
Hines, Thomas S.: *Richard Neutra and Search for Modern Architecture*, Oxford University Press, 1982
 - 15) Alfred Clauss (1906~?) ドイツ生まれ, 1926 年ミュンヘン建築大卒後, 渡米し 1930 年からハウ&レスカーズ。George Daub (1901~?) は 1925 年ハーヴァード大卒, 1928 年からハウ&レスカーズ。
 - 16) Lawrence Kocher (1885~1969) は MIT 卒, 設計活動のかたわら 1928 年からアーキテクチュラル・レコードに参加。
Albert Frey (1903~?) は 1924 年スイスのウインターザー工科大卒後ル・コルビュジエのアトリエ勤務。1930 年渡米しコーカー&フレイ。
フレイに関する参考文献
Rosa, Joseph: *Albert Frey, Architect*, Rizzoli, 1990
 - 17) アルミネアーが出品されたのは, 1931 年 4 月にニューヨークのグラント・セントラル・パレスで開かれた「建築及び関連芸術展」と題する展覧会で, この展覧会はニューヨーク建築連盟展と合同で開かれたものであった。アルミネアーはこの展覧会で 8 日間展示された後, ロングアイランドのショゼットに移築された。
Rosa, Joseph: *ibid.*, pp. 27~28
 - 18) Raymond M. Hood (1881~1934) に関する参考文献
Kilham, Walter T.: *Raymond Hood, Architect*, Architectural Book Publishing, 1973
Stern, Robert A. M.: *Raymond Hood*, Rizzoli, 1982
 - 19) William Muschenheim (1902~?) 1924 年 MIT 卒, 1929 年ウイーンのベーレンス・マスター・スクール卒, 1930 年からニューヨークで設計活動。
マッシェンハイムに関する参考文献
Design by William Muschenheim New York, *Architectural Record*, Vol. 68, pp. 321~326
 - 20) Gill, Irving: "The Home of the Future, The New Architecture of the West, Small Homes for a Great Country, By Irving John Gill, Number Four", *Craftsman*, Vol. 30, pp. 140~151, 220, 1916. 3
 - 21) コンクリート建築の初期の状況に関する資料
Hatheway, Roger and Chase, John: "Irving Gill and the Aiken System", *Concrete in California*, Carpenters/Contractors Cooperation Committee of Southern California, 1990

図版出典

- 図—1, 3, 4, 5, 14 著者撮影
 図—2 McCoy: *Five California Architects*, p. 91
 図—6 Hitchcock: *Modern Architecture*, Fig. no. 53
 図—7 Hubert: *ibid.*, p. 23
 図—8 The Museum of Modern Art: *ibid.*, p. 151
 図—9 Hines: *ibid.*, p. 85
 図—10 *Architectural Record*, Vol. 70, p. 362, 1931. 11
 図—11 Rosa: *ibid.*, p. 41
 図—12 Stern: *ibid.*, p. 79
 図—13 *Architectural Record*, Vol. 68, p. 323, 1930. 10

(1992 年 5 月 10 日原稿受理, 1992 年 11 月 19 日採用決定)